

## ステピナツ枢機卿の列福

この（1998年）10月3日、ヨハネ・パウロ2世はクロアチア訪問旅行の間、第二次世界大戦中ザグレブの大司教であった Alojzije Stepinac 枢機卿（1898~1960）を列福する。枢機卿は、束の間のクロアチアの独立期（1941~45）とその後の共産時代に、抑圧された人々（カトリック、ユダヤ人、正教徒、ジプシー）擁護のために声を上げた。1946年、共産政府は彼をファシズムに協力したというかどで強制労働の刑を課し、死ぬまで解放されなかった。



ローマに住んでいたクロアチアの作家 Ivan Mestrovic は、1943年にステピナツと知り合う。大司教は、彼が説教や書簡を通じて絶えず非難していた当時祖国で行われていた不正行為についての文書を教皇庁に提出するためにローマに短い旅行をしていた。彼はすでにナチに殺される危険のあることを知っていた。ザグレブ駐在のナチの将軍からは「ドイツでは、もし司教がそのような話し方をしたなら、生きては説教壇を降りることはない」と言われていた。Mestrovic は別れるとき枢機卿が「これが最後の別れになることは間違いありません。私は今ナチに殺されるか、さもなければ後で共産主義者に殺されるでしょう」と言ったことを覚えている。師が徐々に毒を盛られて殺されたことは、1996年遺体を調査したときに明らかになった。

### 世界最年少の司教

ステピナツは第一次世界大戦のために遅れて始めた大学の過程が終わった1924年頃司祭になろうと決心した。師は1917年高校を終了したときイタリア戦線に召集され翌年捕虜となる。休戦後一カ月で解放されたが、1919年の春の停戦命令が出るまで志願兵としてギリシアでの戦争に参加した。

1930年司祭叙階。そのわずか4年後、教皇ピオ11世は師をザグレブの補佐司教に任命。36歳の世界で最年少の司教となった。教区の信徒にも知名度が低かったが、人々の尊敬を勝ち得るのに時間はかからなかった。司教叙階の直後に、教区の伝統となっていた Marija Bistrica への巡礼を徒歩で行なう。1946年に監禁されるまで、毎年この巡礼は続けられた。

ザグレブの司教座におけるステピナツの前任者であった Antun Bauer 師はすぐに彼に教区の重要な仕事を任せた。最初の3年間に補佐司教は教区の半分以上の教会を訪問し、200以上の小教区教会で堅信を授けた。現在のザグレブの大司教 Josip Bozanic が昨年3月ステピナツ生誕100周年の記念にあたって出した教区民への書簡で言うように、「師が行かれるところではどこでも司牧が活気づくのが見られた」。ステピナツは既存のカトリックの組織を活性化し、新しいものを育成した。経済的には苦しかったにもかかわらず、1942年にはすでに教区の中に12の小教区が新設されていた。

1937年パウエル師が死去すると、ステピナツ師は司教区の責任者となった。師の最大の関心は教区の司祭と神学生であった。クロアチアのカトリック信徒の社会週間のような一般信徒の活動を促進するための努力も続け、カトリックの新聞に特に関心を寄せた。

師は、若い農民だけでなく青年労働者や大学生の心をつかんだ。これらの人々の中で霊的な指導者になれそうな者を探し、福音宣教を活性化した。聖体大会の機会を利用して、様々な信徒のグループと接触した。社会のあらゆる分野でのキリスト教的意識を高めるために、全般的な霊的刷新の計画の中で、クロアチア教会とローマ教皇庁との一致の1300周年記念の準備をした。

### 少数派の擁護

1936年ステピナツは、ナチ政権からの避難者を援助している委員会に協力することを決めた。193

8年の末に、セルビアの司教たちにその企画に協力を呼びかける書簡を送った後、ユダヤ人難民を助けるための会を設立した。翌年の一月300人のカトリックの富裕な信者に手紙を書き、この組織に資金援助を頼む。すでに1938年3月大学生のグループに対してナチの思想を非難している。「教会は、人種に関して、この原則を主張する。『あなたにしてほしくないことを他人にするな』。・・自国を愛することは、人類全体を愛することと両立する。というより互いに補完し合うことである。すべての民族は神の子である」。第二次大戦中ステピナツは被抑圧者のための努力を倍増した。1941年ドイツによる占領後、クロアチアは独立を宣言した。大司教は最初はこの新政府に好意を示した。新政府が国民の人権と国家の主権を保障すると考えたからである。しかし、すぐにこれが幻影であることが判明した。少数者への迫害が始まったのである。

早くもこの年の4月には、師は内務省に、異民族間の結婚を禁止した人種差別法に対して抗議の声を上げた。5月にはセルビアの正教会の信者に対する迫害についてクロアチアの大統領 Ante Pavelic に直接抗議した。7月には再び書簡において次のように言う。「私はカトリック教会の大司教、代表者として、今日私を強く苦しめているいくつかの事件に注意を喚起したい。このことを敢えて指摘しようとする人はほとんどいないことを確信しているので、私がしなくてはならない。私は、さまざまなところから、アーリア人以外の人に対して非人間的で残酷な扱いがなされていると聞いている・・・」・10月16日ザグレブの司教座聖堂の説教壇から公に人種差別的法律を非難し、人種的宗教的迫害をやめるように要求した。

## 人種差別の断罪

クロアチアの教会は、このころ微妙な問題に直面していた。多くの難民が自らの命を救うために、カトリック教会への入信を希望していたのである。ステピナツは彼の司祭たちに次の司令を与えた。「死の危険にあるユダヤ人や正教徒がカトリックへの改宗を求めてあなたたちのもとにやってきましたら、彼らを受け入れその命を救いなさい。洗礼に際して、宗教的な知識は何一つ求めないように。正教徒は我々と同じキリスト教徒ですし、カトリックはユダヤ教から生まれてたものです。キリスト教徒の使命と義務は、まず第一に命を救うことです。この気違いじみた野蛮な時代が終われば、我々の教会に残ることを望む者はそれが許され、残りは前の宗教に戻ることができます」。人種差別法が公布されてからステピナツはあらゆる機会を利用してそれらを断罪した。1943年、ジャセノビクに強制収容所（ここでは8万5千人以上が殺された）の存在を知って、公に抗議した。「人種の違いは、殺すための理由にはならない。もし教会が、どのような人種であろうとこの不正の犠牲となったすべての人々の擁護のために声を上げなければ、自己の使命を果たしているとは言えない」と。翌年には、「無実の人を殺すことを許すわけにはいかない。・・我々は常に神の法の神聖な原理（殺すなかれ）を教える。それはクロアチア人もセルビア人もユダヤ人もジプシーもカトリックもイスラム教徒も正教徒も、また他のどんな人にも適用される」と言っている。

## 暗殺の試み

戦争は終わったが、迫害は今度は共産主義者によって引き継がれた。それに対してステピナツの抗議は止むことがなかった。1945年3月24日、大司教は、共産党の活動家による何人かの司祭の殺害に抗議した書簡を発表した後、第一回目の逮捕を経験した。3週間後に釈放され、その数日後ユーゴスラビアの新しい指導者 Josip Broz Tito（チトー）と会見。チトーは、大司教にクロアチア教会のローマからの分離を宣言するように説得を試みたが、大司教は断固として断る。

1945年9月大司教はユーゴにおける教会の迫害についての司教書簡を再び出した。その中で師は第二次世界大戦以後、カトリックの司祭の中で243人が処刑され、169人が逮捕され、89人が行方不明になっていると発表している。

45年の11月ザグレブ郊外で新しく建てられた教会を訪問中に、暗殺未遂事件が起こった。それ以降大司教は町の境界線を越えることはなくなった。共産党の活動家たちは、師に対する反対運動を組織し、その処刑を嘆願する署名を集めた。

### でっちあげ裁判

46年6月12日、ステピナツは再び逮捕された。ウスタチャ体制（戦中のファシスト政府）への協力のかどで形だけの裁判が用意された。人民裁判は、被告に対して告発側に59人、弁護側に7人の証人を許可した。この7人の一人は、セルビア人の正教徒でザグレブの大学病院の院長、**Mulutin Radetic**であった。彼は、大戦中にパルチザン（反ナチの共産軍）兵士の治療をしたというかどでウスタチャから死刑を宣告されたが、ステピナツの個人的な介入で助かった人である。彼の証言は判事たちには相手にされず、彼は「坊主、ファシスト」と罵られ部屋を追い出された。他の証人たちも似たような扱いを受けた。まもなく **Radetic** は病院の職を失う。

10月11日、大司教には16年の強制労働と5年の市民権剥奪の刑が下された。かくて **Lapoglava** の収容所に送られたが、看守たちには大司教に判決通りの労働を命じる勇気がなかった。なぜならば、大司教がクロアチアの国家的シンボルであり、彼に対するいかなる暴力も他の囚人の反乱を引き起こすと知っていたからである。それゆえ、彼をほとんど換気もないような小さな独房に押し込めた。

1951年には大司教はひどい病気になった。国際的な圧力のおかげで、大司教は自宅軟禁となった。厳重な警備の下で、**Krasic** の教会の中で生活し、そこで最期を迎えた。

### 牢獄からの手紙

ステピナツは、外部と遮断されていたにもかかわらず、無数の手紙によって数多くの人に話しかけることができた。**Krasic** で生活した8年間に5千通以上の手紙を書いた。いくらかの手紙は特に熱を帯びている。それは、司祭たちを体制の支配下にある聖職者の団体に加入させようとする政府の圧力に抵抗するよう励ます手紙である。師はその陰謀が、彼にとって最も神聖な宝である普遍性と教会の一致にどれほどの害を与えるかを知っていたからである。

手紙の受取人には手紙を破り捨てるように頼んでいたが、手紙を保存した人たちもいた。ステピナツの手紙でおそらくもっとも目を引くのは、彼の監視人について触れるものである。大司教は絶えず彼らのために祈っていた。列福調査で明らかにされたが、枢機卿の書いたもののなかで、彼の迫害者に対する恨みの言葉は一言も見つからなかった。

1952年、ピオ12世はステピナツを枢機卿にすることを発表した。ユーゴ政府は、これに抗議してバチカンとの国交を断絶した。しかしながら、教皇は翌年この任命を実行に移した。

### 名誉回復

1959年12月5日ステピナツはユーゴ政府に書簡を送り、自分が受けている不正な扱いを明らかにした。「監視人たちはあなたがたの命令どおり、私から一瞬たりとも目を離すことなく、私が生きていくことを不可能にしています。しかし、私は神の恩恵により最期まで前進し続けるでしょう。誰をも憎むことなく、また誰をも恐れることなしに」と言っている。彼が帰天したのは、その2カ月後の1960年2月10日のことである。毒殺の噂を裏づける証拠をなくすために、死体から内蔵が処分された。1996年遺体が発掘され、列聖省の専門家によって調査された結果、その骨から毒物の跡が検出された。この発見によって、1997年11月11日同省はステピナツを殉教者とした。

1992年新クロアチアの議会は満場一致でステピナツ枢機卿を、粛正された共産主義者を含めて、あの時代に処刑された他の政治犯とともに、その名誉回復を決議した。ステピナツについて議会は、「枢機卿は、

無実であったにもかかわらず、共産政府が命じた教会の分離に反対したため、また第二次大戦中に抑圧された人々を人種や宗教の差別なしに助けたのと同じように、共産政府の暴力と犯罪に反対したかどで処刑された」と宣言した。

ヨハネ・パウロ2世は、ステピナツのことを「人権とキリスト教的尊厳の名において共産主義のくびきに抵抗したクロアチア教会の砦」と呼んでいる。

### 枢機卿の弁護者たち

ステピナツの処分が不正であったことは、当時のさまざまな証言だけでなく、第二次大戦中枢機卿がいかに迫害された人々のために努力したかを語る人士たちの発言でも明らかである。

彫刻家 Ivan Mestrovic はあるユーゴ共産党の指導者が彼に次のように打ち明けたことを教える。「ステピナツは確かに強い信念をもった偉大な汚れない人物である。もし政府と妥協していたら、今頃は自由の身で、我々にこれほどの苦い体験をさせずにすんだであろう。彼のクロアチア民族主義は、我々には不都合ではなかった。もし、クロアチアの教会分離を宣言していたなら、我々は彼を英雄にしていただろう」。

同じ Mestrovic は、肅正される前の、つまりまだチトーの右腕であった時代の Milovan Djilas から聞いた言葉を伝える。「本当のことを言うならば、ステピナツは十全な人間で不屈の男であると考えているのは私だけではない。彼は無実であったが有罪となった。しかし、歴史においては、正しい人間が政治的歴史的状況のために有罪判決を受けることがしばしば起こるのだ」。

ステピナツの判決の二日後、合衆国のユダヤ人共同体の指導者であった Louis Breier はニューヨークでこの判決に抗議するために集会を開いた。そこで言う。「この偉大な人物はナチの協力者として告発されている。しかし我々ユダヤ人はそれを否定する。我々は彼が1934年からヒトラーとその部下の迫害を受けていたユダヤ人の変わらぬ友人であったことを知っている。Alojzije Stepinac は、まさしくそうするのがもともと危険であった時期にナチに対して抵抗の声を上げたヨーロッパでは数少ない人の一人である。・・彼はナチのニュールンベルク法に対して恐れなく公に反対し、一步も譲ることがなかった。・・教皇ピオ12世の次に、ステピナツ大司教はヨーロッパで迫害を受けたユダヤ人の最大の擁護者である」。

1995年『エルサレム・ポスト』誌はステピナツを中傷する記事を載せた。それに対して Ariel Shomrony が自分が体験した事実を公にする記事を同誌に送った。シヨムロニは、第二次大戦中ザグレブの大ラビ Shalom Freiburger の書記をしていた。ステピナツはラビに自分の家に隠れるように勧めたが、ラビはその申し出を断わり自分の民と同じ運命に身を任せることを選んだ。彼はアウシュビッツに送られ1943年にそこで殺される。シヨムロニは、ラビと大司教のパイプ役を務めていたが、次のように言う。「ステピナツがナチに好意的であったとはまったくの嘘である。それどころか、大司教は、1941年のクロアチアの”独立”以前から、ナチの人種理論は宗教と相容れないとして公に断罪していた」と。

彼はさらに「ステピナツは戦争中修道院を難民の隠れ家に提供した。Lavoslav Schwarz の老人ホームから暴力的に追い出された50人以上のユダヤ人の老人を、終戦まで司教の所有地に匿っていた。同様に、ユダヤ人共同体は、大司教から Jasenovac の収容所に入れられたユダヤ人のために毎月金と小麦の袋をもらっていた。・・・ステピナツが司教座聖堂において日曜日のミサの説教でユダヤ人だけでなく、正教徒、イスラム教徒、ジプシーの人権を侵害するあらゆる法律を非難していたことは事実である。ザグレブの我々の会堂の破壊（1941年）を非難したさい、彼は『神の家』を破壊することは許されないと断言したのである」。

(Jordi Ben tez, ACEPRENSA, 127/98, 23-IX-98)